

方正日本人公墓を参拝する旅

島田 成夫

10月10日から17日までハルピンと長春に行ってきました。この旅は伊藤州一さんご夫妻に同行し、お墓詣りと伊藤さんが資金を寄贈して改築したハルピンと長春の小学校を訪問する旅です。

ハルピンから車で約3時間、防雪林とトウモロコシ畑が飽きるほど続く。この長い道のりを開拓民の人達は歩いて避難しようとしたのだろう。ようやく方正の公園墓地に到着した。車から降りると、10月の風が冷たかった。歩き始めると少し緊張した。この地の下に約5000名の方が、名前を知られることもなく眠っている。一步一步大地を踏みしめながら感じていた。どんなにか寒かったろう、どれほど苦しかったろう、誰にも手をとられることなく、誰にも名を呼ばれることなく亡くなった方も多いただろう。

中国残留孤児・婦人の事を知ったのは70年代の後半、方正の日本人公墓のことを知ったのはいつ頃だろうか？ 今やつとその公墓に参拝することが出来る。伊藤さんご夫妻と日本から持参した、酒・水・煎餅とお線香を墓前に供えて黙祷した。

89年茅ヶ崎鶴峯高校に転勤し、そこで中国残留日本人の2世の生徒達に出会った。彼らには、一部の科目は教室での授業と平行して個別授業を行った、初め2名の男子生徒の日本史の授業を担当し、以降数年に渡って中国帰国生徒と接する機会があった。彼らは何時も屈託無く中国での生活を話してくれた。油条を豆乳に付けて食べるのは美味し、と。

2年生の3人の授業の時、3人とも日本語はもうすっかりマスターし、一般教室の授業でも十分可能だった。ただ一人の生徒の休みが多かった。気にはなったが長期ではないので特に理由を聞かなかった。秋が終わる頃このままでは進級が難しくなる状態になっていた。2人の友人に「どうしたのかな？」と尋ねた。「彼女の母親が病気で病院に行きます。彼女はその時付き添わなければなりません」。中学・高校生の日本語習得は目を見張るほど早い、4、50歳台の父母の日本語学習は機会も少なく難しい。

3年生の男子生徒が中国に一時帰ることになった。彼の母親は日本人で、父親は中国人だ。中国人の父は、彼の母親が「日本に帰国したい」と言った時、「君達の母親は今日まで中国で大変苦勞してきた。日本に帰りたいというなら一家全員で日本に行こう」。家族4人で日本に帰国した。しかし、誰が想像できるだろう、彼の父親が癌を患ってしまった。父親は死の迫った病床で「やはり故郷は懐かしい」とつぶやいた。母親は働いている、長男の男子生徒は病の父親を連れて故郷に帰り、看病し最後を看取って多くの人達に挨拶して再び日本に帰ってきた。

1名、2名の歴史を辿ってもはかりきれない人間の命の重さがある。満蒙開拓民の27万人と言われる方々にどれほどの歴史があったのかとても計り知れない。この地に眠っている5000名の方々も。

日本の軍部、政府の無謀な政策、無責任な対応が満蒙開拓民の人々の人生を過酷な、深刻な、計り知れない重いものにした。45年8月各地の開拓民は、最後の望みを託してこの方正地区まで避難してきたが、関東軍に裏切られ、食糧もなく零下40度の厳冬の中で、寒さと飢えと病で命を失った。

ハルピン・長春を訪れる機会を得て、出来る限り有意義な旅にしようといういろいろ資料を探した。むかし三木卓の『滅びた国の旅』を読み、その後角田房子、小川津根子そして井出孫六、小林英夫などの本などを読んでいたが、「方正日本人公墓」のことについては知らなかった。

偶然資料を探していたところ、ネットで「方正友好交流の会」を知り、電話すると大類さんが快く対応してくれ、「星火方正」の冊子と資料、さらにハルピンの石金楷さんを紹介して頂いた。

方正で亡くなり野ざらしにされた日本人の方々の冥福を祈ろうと、63年に方正県の方々が省や中央政府の承認を得てこの地に公墓を作った。私はこの経過を、大類善啓さんの朝日新聞「私の視点」の記事と、当時黒竜江省人民政府外事弁公室の趙喜晨さんの回想記録で詳細に知った。特に文革の中でも方正地区の方々や省政府が身の危険も感じながら、この公墓を守り続けたことは感動的なことだ。

墓地にしばらく佇み、読んできた資料を思い起こしながら出来る限り当時の、そしてこれまでの状況を思い起こそうとした。関東軍幹部の東宮鉄男や加藤完治ら中心に企図された「満蒙開拓民」構想は、「武装移民」時代から、二・二六事件後、帝国議会で「国策」として決定し、“お国のために、五族協和”をスローガンに貧しい農村の2、3男がそして、花嫁候補が送られた。敗戦の時期には北部の開拓民は27万人と言われる。

この国策として積極的に、時には強制的に移民させた「満州の土地」は実質的には、現地の漢族、満族、朝鮮族などの既耕地を、安価にあるいは乱暴に入手したものであった。初めから、五族協和などはなく、危険を孕む開拓民の生活であった。開拓民は「被害者であると共に加害者でもあった」。開拓民はその土地を一生懸命耕作し豊かな実りを作り、「これは天皇に、靖国に奉納する作物、これはお国のため戦う関東軍の兵隊さん達に差し上げるもの」と日々労働に励んだ。

44年マリアナ沖海戦に敗れ、サイパン島を占領された時から、日本の敗戦は決定的になっていた。軍部も実情は承知していた。東条内閣に変わる小磯内閣は、戦争処理内閣だったはずだが、しかし軍部の誰も戦争を終わらせる方策を積極的に語らない。強気の、硬派の意見がむなしく軍部・政府を覆った。

45年4月「中立条約は延長しない」との連絡からソ連の参戦が十分に戦略的に読み取れたはずだ。5月には具体的に駐ソ大使、武官から「ソ連参戦」の具体的連絡と「早期の和平工作」の必要性が軍部中央・政府に連絡されている。しかし深刻な即刻の事態と受け止められた様子がない。「新京」の関東軍司令部の住宅が新装改築されている。「日ソ中立条約」があり、ソ連は参戦しないだろう。ソ連の条約違反は明白だが、ソ連参戦の状況は具体的に連絡されている。関東軍はほとんど対応せず、8月8日のソ連宣戦布告、「満州」侵攻に至ってはじめて具体的な対応をとった。それは「開拓民と居留民を速やかに避難させる」対策ではない。すでに、南方移動で減少・弱体化していた関東軍を、開拓民などの現地応召からさらに「根こそぎ応召」して補充していた関東軍は、大連・新京・図門以南に移動し、朝鮮半島・本土防衛に当たる。開拓民から召集された兵士達は、お国のために、その自分たちの家族、親戚、友人を「放棄」する命令をされる。取り残された、「放

棄」された開拓民は年配男性か女性、子供が圧倒的に多かった。そこにソ連が参戦し、自国民を保護すべき関東軍は移動し、開拓民は言葉では言い尽くせない困難な状況、逃避行が行われ、多くの人命が失われた。

方正地区日本人公墓、麻山地区日本人公墓、中国養父母公墓、もう一つ藤原長作記念碑（遺骨が分骨されている）を参拝し、陳列館を見学した。周囲の様子はもうすっかり秋が終わり、落ち葉を踏みしめながら、冷たい風に吹かれて墓園を離れた。開拓民の人達は、45年敗戦の時この10月頃もまだどこに逃げのびればよいのか分からず、寒さと飢えと病に苦しみながら歩いていたのだろう。細い雨が小雪に変わったように見える。10月12日の寒い一日だった。

ハルピンに戻って大類さんに紹介いただいた、紅十字会養父母連絡会事務局長の石金樫さんにお会いすることが出来た。現在ハルピンで確実に連絡取れる養父母の方は5名になりました。年に2度はお会いしていますが、なかなか生活が大変の様子です。石さんから『中国残留日本人孤児』という極めて貴重な本を頂きました。また「DVD」も翌日コピーしてホテルまで届けてくれました。残念ながら養父母連絡会はハルピン以外にはないので他の地域のことは明確ではないとのことでした。

15日長春で、「長春中日友好楼」を探しました。通訳の方は知りませんでしたが、幸いに運転手さんが知っていました。長春市平陽街に見つけることが出来ました。89歳の2名の方が生活していました。男性の方は病気で休養している様子でしたが、女性の方はお元気で伊藤さんご夫妻と私を部屋に招き、「座ってください」と椅子を勧めてくれました。笑顔の「秦お婆さん」にお会いすることが出来ました。残留日本人の帰国が盛んになった80年代後半頃、私は養父母はどうなるのだろう、と思っていた。大類さんのお話では日本政府が養父母の生活には全く支援金を補助していないという。もうかなりの高齢で生活は大変厳しい。日本に帰国した方々も言葉の壁が厚くなかなか十分な仕事に就けない。養父母の支援はしてあげたいが自分たちの生活が精一杯だ。ぜひ日本政府の支援を要望する。

もう一つ伊藤さんご夫妻に同行して貴重な体験をした。

方正の街から車で2時間くらい「沙河子の炭坑」にある小学校を訪ねた。炭坑村に入ると周囲一面ボタ山、昨年も来たという運転手さんも道が解らない。通行する人も、車もなくボタ山の中を30分探してやっと小学校に着いた。伊藤さんが寄贈して改築したのは05年でその時は100名以上の子供達がいたが、炭坑の爆発によって操業が出来なくなり、失職した人は皆炭坑を離れざるを得なかった。今年小学校に在籍していたのは4年生の男子生徒2名だけ。2名だけの学校生活は寂しいだろうな、おとなしく、何かを聞いても首を頷くように振る姿が印象的だった。私は地図を広げ、中国と日本の位置を探し、面積や人口を尋ね、何倍かな？ と尋ねた。通訳、先生を通して子供達は計算して答えた。やっと少し表情が出てきたように思えた。お土産を渡し別れを告げて外に出ると相変わらず重く黒い雲が立ちこめ細かな雨が降っている。子供達の家はどこ？ 冬は寄宿舎かな。彼らがなんとか小学校・中学までは学習を続ける事が出来ることを祈った。炭坑は今再操業に

向けて再建中だという。

長春では「双陽区農村の小学校」を訪問した。校門に着くと子供達が2列に並んで校舎の入り口まで並んでいる。これはとても苦手、出来れば平常の授業をして欲しいが・・・。校長は会議室に招いたが私たちは少しでも子供達と会うことを望んだ。少し大きな教室に全員が集まっていた。03年に改築した時はやはり100人以上いたが、農村の過疎化が進み、両親の出稼ぎなどによって、今年の在籍は、1年から6年まで54名。

伊藤さんの挨拶後、私はここでも地図を広げ話をした。1年から6年までいる。通訳と先生に尋ねながら、一人一人に回答して貰った。やはり54名の生徒がいると活気がある、沙河子の炭坑の小学校は、村全体が元気がない状態、子供が元気がないのも仕方がないだろう。長春では子供の質問が相次いで面白い、次々に手を挙げて質問する。伊藤さんと2人でせっかく手を挙げている子供を見逃さないように我々も夢中になって対応していた。質問が終わると、子供が前に出て、歌う、踊る、演技をする、漢詩を暗唱する。事前に練習したのかは解らないが、積極的に手を挙げて名乗る姿に、我々も、先生も、子供もみんな笑顔で楽しめた。

尖閣列島問題の時期でした。タクシー乗車拒否に2度会いました。その一方で16日私は一人で、長春公園に行き、友人から聞いた「日本人慰霊碑」を探しました。公園では土曜日の晴天もあって沢山の人が運動していました。ローラー・スケートをする高齢者グループの側でしばらく眺めた後、「日本人の慰霊碑を探しているが知らないか」と尋ねました。すぐ10名ほどの人が集まり、みんな以前は有ったが、今はもう無くなった、と言います。残念戻ろうとすると、一人の女性が、墓碑は壊れて解らないが遺跡はある、私が連れて行ってあげる。「很近」と言うのですが、20分以上歩いて大きな森林公園に着きました。その公園の中で彼女は落ち葉を掻き分けあちこちを探し回り、やっと墓跡と壊れた墓碑らしいものを見つけました。かなり崩れた円墳状のものが幾つもあり、その周囲に2,3重に樹木が植えてありました。帰りはバス停まで送ってくれました。バスを見つけると彼女は走り出し、ドアを押さえて運転手に「ちょっと待って、日本人だ」を繰り返し、私に「早く急いで、駅は終点だから」と背中を押しました。バスに乗ると最前列の若い女性がすぐ席を譲ってくれました。帰国後写真を送ろうとしたら、彼女の方からメールが来て、メールに添付すれば時間もお金も省けると。最後に嬉しい体験をして帰国しました。

トウキョウ・オキナワ・ヒロシマ・ナガサキを日本人は実感することが出来る。しかし柳条湖、慮溝橋、南京、731部隊、「方正」は実感はおろか事実も知らない人も多いのではないだろうか。私の旅は、過去を振り返り、未来に続く友好交流を続けて行きたいと念願する旅だ。今私にはお金も力もない、いただいた大類さんのパンフレットをコピーしてあらゆる機会に知らせていきたい。

(しまだ・しげお：1941年生まれ。02年、神奈川県立高校を定年退職。退職後中国語を学習し、中国の戦争責任を考える旅と観光旅行をしてきた。方正日本人公墓への旅は、「私にとって一段落の旅になった」とのこと)